

光村図書の教科書は

「十」分に良い



大阪府立大学教授

張

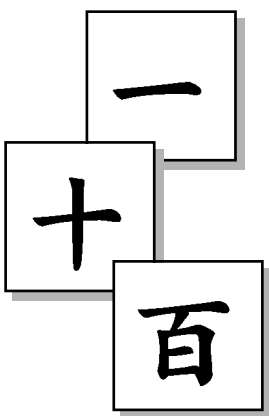
麟声

前号の漢字談義で取り上げた「光村図書の教科書は一番良い」という言葉を、光村図書の社員が目にするところ、それはそうだ。「と胸を張ることになるだろうが、光村図書の教科書は十分に良い」となると、その振る舞い方はいくらか変わってくるかもしれない。「十分に良い」のほうは、褒め言葉ともいえるが、使い方によっては、物足りる程度よくて、飛び抜けて良いわけではないという意味にもなるからである。

しかし、これを日本語のわからない中国人が漢字だけを拾い読みしていくと、「光村図書さんはそんなに立派な会社なのか。」とたいへん感心してしまう。その理

由は、中国語の「十分」は、日本語の「たいへん」のような意味だけで、「物足りる程度よく」というニュアンスをまったく持たない。それで、「光村図書の教科書は十分に良い」という言葉を「光村図書の教科書はたいへんに良い」としか読めないからである。

それはともかく、「光村図書の教科書は十分に良い」は、日本語として読んでもそれなりに褒め言葉だし、ことに中国語的に読むとたいへん良い意味になるのだから、これで「十分」ではないだろうか。



張 麟声（ちよう りんせい）

大阪府立大学総合科学部教授。日中両国の言語・文化を比較という角度から研究。日本で出版された主な著書に、『日本語教育のための誤用分析 中国語話者の母語干渉20例』（スリーエーネットワーク）、『日中言葉の漢ちがい』（くろしお出版）などがある。現在、光村図書が発行する日本語教科書『新版中日交流標準日本語・初級』の編集委員を務める。